シンポジウム

15時10分～16時30分　シンポジウム　会場　大ホール

「こうなると良いな！地域リハ」～つながろう在宅リハ～

シンポジスト

なごみの陽訪問看護ステーション　岡田　智恵

白金整形外科病院　伊藤　俊介

千葉県在宅リハビリテーション研究会　松川　基宏

船橋市リハビリセンター　江尻　和貴

座長

袖ヶ浦さつき台病院　総合広域リハケアセンター

竹内正人

千葉県千葉リハビリテーションセンター　田中康之

多職種連携の体制づくり
ちれん（ちいきれんけい）～「医療と介護をつなぐ会」@おゆみ野」を立ち上げて～

○岡田智恵[1)]
世話人：代表　酒井[1)] 江口[3)]　能瀬[2)]　平岩[4)] なごみの陽訪問間ステーションスタッフ
1）なごみの陽訪問看護ステーション　2）ウイング介護相談室
3）誉田訪問看護ステーション　4）ヤマシタコーポレーション

はじめに

在宅療養者を取り巻く環境は様々な上、疾患構造も複雑化し、介護と医療の多様なニーズの対応には多職種間の連携体制が重要です。平成23年度「千葉市地域支え合い体制づくり事業」の支援を受け、地域における医療と介護の連携体制づくりを実施したので報告します。

活動の目的

1）　多職種が集まれる「場所」をつくる
2）　医療と介護を「つなぐ機能」をつくる
3）　学習会により「知識の向上」をはかる
4）　交流会や事業所紹介など「顔の見えるつながり」「情報発信の場」をつくる

活動の実際

助成期間の23年度は4回の学習、交流会を実施し、事後アンケートより「顔が見える安心感」「業務の円滑」「より良いサービス」につながった　との結果を踏まえ、翌年度からは自主運営として年3回を定例化し、これまでに12回開催しました。介護支援専門員　介護職　看護師　理学療法士・作業療法士　福祉用具専門相談員の他、地域ボランティア等　のべ598名の参加があり（67事業所　1回平均49、8人の参加者数）　講師は医師　薬剤師　認定看護師　理学療法士　介護福祉士等に依頼し、現場に直結する問題や疑問点をテーマとしました。事業所紹介や宣伝、交流会など情報発信の場として「顔の見えるつながり」の構築につとめています。運営上、講師謝礼や資料代として参加者より500円の徴収が必要な他、会場確保への苦慮が問題となっています。

考察

参加者の多くは多職種連携の必要性を感じ、本活動は職種間の相談や情報交換を行い易くし、安心感につながると考えます。共に学ぶ事は、職種の役割を再認識する場となり「職種の役割の再認識の機能」となったと考えます。この機能により円滑な業務配分ができ「専門的な知識や技術の習得」は質の高いサービス提供につながると考えます。療養者の生きる意欲や能力を生かしながら在宅生活を支援する事は、地域リハビリテーションの観点からも重要です。この活動から考える多職種連携の意義と今後の課題について報告します。

市原地域リハ事業で取り組んでいる「ちーき会」の活動について

○伊藤 俊介、佐藤 潤、佐藤 正司、加藤 瑞紀、中島 理雄、矢部 信之、鈴木 斌(MD)
（市原地域リハビリテーション広域支援センター）
（医療法人社団白金会　白金整形外科病院　リハビリテーション科）

白金整形外科病院は平成24年度に千葉県より指定を受け、市原地域リハビリテーション広域支援センター（以下支援センター）として活動している。
今回、支援センター事業の一環として取り組んでいる「ちーき会」の活動について報告する。
平成24年度の活動の中で地域の問題を探る為、市内の医療機関、介護事業所等へ日常業務で困っていることについてアンケート調査を行った。特に多かった意見が、他の機関の他職種と話をする機会がない、地域の事業所が集まって話ができる場がほしいというものであった。地域リハビリテーションとは「障害のある人々や高齢者及びその家族が住み慣れたところで、そこに住む人々とともに、安全に、いきいきとした生活が送れるように、医療や保健、福祉と生活にかかわるあらゆる人々や機関・組織がリハビリテーションの立場から協力し合って行う活動のすべて」と連携指針に定義されている。地域の声と連携指針を踏まえ、平成25年5月よりちーき会（市原の地域リハビリテーションを考える会）を立ち上げた。ちーき会は『毎月・気楽に・協議』をコンセプトに、方針を『まずは顔が見える関係作り』として活動している。ちーき会は市内の医療、介護、福祉、行政機関を対象に毎月市内公共施設で開催。平成25年5月に第1回ちーき会を開催し、参加者は年々増加している。今後も市原地域の各機関との顔の見える関係作りを推進し、市原地域における『地域リハビリテーション』を広げていきたいと考えている。

千葉県在宅リハビリテーション研究会の活動
～在宅リハビリテーションの質の向上・連携構築に向けた活動～

松川 基宏（千葉県在宅リハビリテーション研究会）

人は本来、人として生まれ、生活していく中で、すべての人が同様にその生存権を持ち、「幸せ」を探求する権利を有している。「リハビリテーション」とは、人生において何らかの障がいを負ったとしても、その有する権利はゆらぐことなく、住みたいと願う町で、住みたいと願う家で過ごせる社会の実現のためのそれをサポートするすべての活動を表す。しかしながら、現在医療、介護、福祉の制度においても、地域性、社会性、経済性等の影響を受け、十分なサービスが行き届いていない状況がある。

在宅において、私たちリハビリテーションに関わる職種は、リハビリテーションを必要とする人の望みを実現させるべくお手伝いをする立場にあり、そのためにも個々、及び地域間の格差をなくし、また医療機関、介護施設・事業所、福祉施設・事業所等がその目的達成のために、私たち自身及びそれに関わるスタッフのスキルを向上し、ネットワークを構築、またそれらを啓発していくことが必要である。

平成22年11月同年春に行われた全国訪問リハビリテーション研究会基礎研修会 in 千葉で集まった講師や準備委員等が懇親会を重ね、以下の活動を行う目的で伊藤氏（現日本訪問リハビリテーション協会顧問）を顧問に据え、世話人3名を中心に運営委員会（25名）を設置し同会を結成した。

（1）在宅リハビリテーションに関わる情報交換、ネットワークづくり等の支援
（2）在宅リハビリテーションの普及啓発、及び質の向上に向けた地域貢献的活動
（3）在宅リハビリテーションに関わる研究活動
（4）その他、研究会の目的達成のために必要な諸活動

平成26年4月には規則を改編し、組織編成の変更を実施。現世話人に加え4名の世話人を追加、以下の4つの担当部門を設置した。

連携・スキルアップ部：　在宅リハ関連施設のネットワーク化、研修会を担当
小児部　　：　ちーねこの会（千葉県ネットワークこどもの会）を担当
パス・評価部：　千葉県脳卒中パス地域生活期シートの運用等を担当
事務局　　：　事務担当

（主な活動）
○運営委員会の開催（ほぼ毎月1回）　意見・情報交換、研修会等の企画検討、その他
○研修会・勉強会の開催（おおむね年1回）
○千葉県脳卒中パス地域生活期用シートの作成
○小児ネットワークの検討・構築（ちーねこの会の活動報告参照）

今回は千葉県在宅リハビリテーション研究会の具体的な活動報告及び地域における課題、当会の今後の方針等を報告する。

船橋市における地域リハビリテーションの展開について
～船橋市地域リハ研究会の活動と船橋市地域リハビリテーション拠点事業を中心に～

江尻　和貴（船橋市地域リハ研究会　事務局、船橋市リハビリセンター　ソーシャルワーカー）

船橋市では地域リハビリテーション体制の構築と推進を目的に平成19年に「船橋市地域リハビリテーション協議会」（以下協議会）が設置された。平成20年、地域リハ推進を図るため、協議会委員であり、船橋市立リハビリテーション病院指定管理者代表が発起人となり、市内で活躍するメンバーが集い、「船橋市脳卒中地域医療連携パス」の作成に着手した。平成21年にパスは完成したが、ほどなく「千葉県共用脳卒中地域医療連携パス」が完成したため、同パスの活用には至らなかった。しかし、パスを作成するために議論を重ねたことで、メンバー間の相互理解が深まり、同年9月「船橋市地域リハビリテーション研究大会」を開催した。会場からは、このような研究大会の継続的な開催と市内中心部だけでなく、各地域での勉強会を望む声が聞かれた。このため、平成22年3月「船橋市地域リハ研究会」（以下研究会）と名称を定め、活動を開始した。平成26年度の主な活動は、研究大会2回、地区勉強会3回、市民公開講座1回、介護職員向け勉強会11回、摂食栄養サポート勉強会2回となっている。これら活動の原動力となっているのが、市内の関係団体で構成され、年10回ほど開催される世話人会である。また、地区勉強会を開催するにあたり、準備委員会を勉強会毎に4回程度開催している。

平成26年度「船橋市リハビリセンター」が地域リハビリテーション支援拠点と位置づけられ、協議会及び研究会と密接な連携のもと、事業を継続・発展させていくこととなった。船橋市における課題の一つとして、生活期リハの基盤整備がどの程度充足しているか不明であることが挙げられる。そこで、本年度は実態の把握を行うべく、市単位での訪問リハ、通所介護、通所リハ及び回復期リハ病棟の連絡会立ち上げの支援等を行っている。

当日の報告では具体的な活動と多職種連携の礎となっている地区勉強会を中心に報告する。